

# 山崎郷土叢

NO. 123

26.8.24

山崎郷土研究会  
兵庫県宍粟市山崎町

大谷司郎

## 郷土史研究の先駆者・片岡醇徳の足跡

大谷司郎

### 片岡醇徳の略歴

片岡醇徳は、通称米屋五郎太夫、号を怒軒といった。寛永五年（一六二八）山田町米屋六兵衛正貞の子として生まれた。米屋六兵衛は、元和三年（一六一七）町方に「町年寄役」が設置されたときに、山崎町の英賀屋弥次兵衛、龍野屋孫兵衛とともにその役に就いた一人である。元和三年といえは、池田輝澄が宍粟三万八千石を領して山崎に入封し、宍粟藩が成立した二年後にあたる。後に寛永七年（一六三〇）に小原屋五郎兵衛が、また、寛永十年（一六三三）には橋屋三郎兵衛が追加され、五人の町年寄で町並みが発展してきた山崎の城下町十カ町の行政を掌握した。のちに役職名は大年寄役と改められ、その下役として各町に年寄が置かれた。大年寄役を勤めたのは古くからの有力商人の家に一定され

### 目次

郷土史研究の先駆者・片岡醇徳の足跡	大谷司郎	1
「敬」について	鎌田裕明	4
戦国武士から高瀬舟回漕業へ		
―出石下村家の由来―	浅田耕三	9
聖山城跡と秀吉軍の行軍ルート	竹内克司	11
まち歩きガイド発足	神戸新聞掲載より	14
興国寺の山門と梵鐘	会報部	15
江戸時代の宍粟郡金屋村鋳物師		
長谷川氏の梵鐘について	片山昭悟	16
二十六年度研修旅行のお知らせ		20
事務局だより		20
編集後記		21

ていたようである。

文献に出てくる米屋を追うと、米屋六兵衛が元和三年（一六一七）と慶安四年（一六五一）、米屋五郎太夫が寛文十二年（一七〇七）、米屋儀平が元禄十二年（一六九九）と宝永二年（一七〇五）、米屋六郎左衛門が享保九年（一七二四）、同十九年（一七三三）、米屋治郎右衛門が文化十四年（一八一七）とあり、城下町山崎に江戸時代を通してその名を刻みこんでいる。

醇徳の片岡氏は、山崎町五十波の片岡家に残る「過去帳」によ

ると、赤松則村より出、東播三木別所氏の家臣で、代々、三木郡大村を領していた。醇徳の父正貞は、その後、姫路英賀村へ移り、そこから山崎山田町に入ってきた。万治三年（一六六〇）に没している。母は姫路野村九良左衛門の娘であり、九六歳で亡くなった。山崎町五十波の永孝林墓地に葬られている。

醇徳は、池田輝澄の治世に生まれ、城下町が発展していく過程を見ながら成長し、松井康映五万石時代から、池田恒元・政周・数馬と続く岡山池田三万石時代、そして本多忠英から始まる山崎本多一萬石時代を生き抜き、その間、父から受け継いだ大年寄役として、それぞれ領主の変遷や、時の流れをつぶさに見ながら、多くのことを感じ取ったことだろう。

父が亡くなったのが、醇徳が三三歳のときであった。父の墓標を船元の共同墓地に建てたところ、間もなく揖保川に大洪水が起こり、多くの墓標とともに父の墓標も押し流された。自責の念にかられた醇徳はうつ病になり、その療養のため京都へ旅立つこととなった。

京では療養の傍ら、中村暢

文・地理から日常実践道徳などを身をもって学び、その学説に傾倒し、熱烈な実行者となって、出郷以来の病も癒えて山崎に帰ってきた。

### 永孝林の墓地

この時母は既に古稀を超えていた。父の墓で苦い経験をし、暢

斎のもとで孝養を学んだ醇徳は、母の安住の地を求め歩き、やつとの思いで山崎から一里足らずの地で、揖保川の清流を望む五十波の高台を選定した。その後時を経ずして亡くなった母をこの地に葬った。

五十波村は三日月藩領であり、醇徳の孝心を聞いた藩主森対馬守は宝永二年（一七〇五）この墓地を免租地とした。

同年、醇徳は七八歳の老躯ながら、京都に出て暢謙之に会い、母の墓所の顛末を話し、謙之は宝永四年（一七〇七）醇徳に『永孝林記』を贈っている。

この『永孝林記』は本会報第二号（昭和三十三年十月発行）に安井俊二氏が内容を記されている。また、平成六年に本会が発行した『校訂播州宍粟郡守令交代記』にも載っている。

### 宍粟郡守令交代記を著す

醇徳は、元禄十二年（一六九九）七十二歳になって『宍粟郡守令交代記』を著した。その序文に、

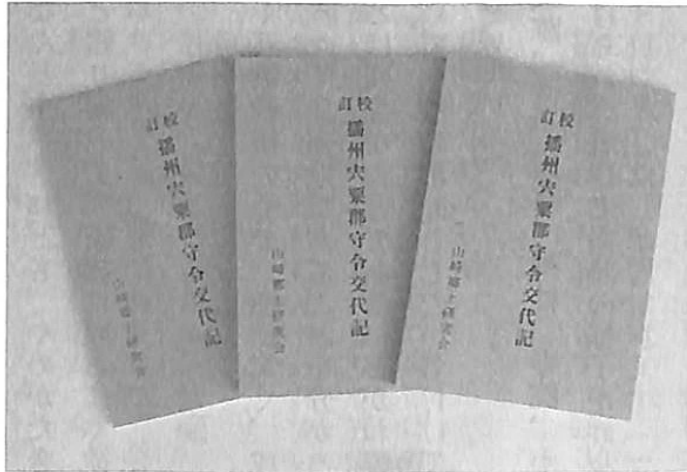
夫れ、我郷に、いにしへより守令交代綿々として今に続きり。予、此所の産にて、既に今、いにしへに稀なる年に二とせを過ぎ、衰朽の身に到るまで、守令の姓名、交代の事蹟を知らざりしは、いとほいなく思ひぬ。しかりといへども、あがれる世の国司・郡主の事実を知ることあたはず。建武以来

の雑記、人口に残りし説などをひろい輯めこれをすつ。しかれども、郡主の姓名しれがたきは国主をしるす。その草稿を宍粟郡守令交代記といふ。

とその動機を記している。

郷土史研究書としては、早い時期のもので、著者の教養に恵まれ、真摯な努力と熱意によって、かなり高い価値と効果とを發揮している。醇徳の郷土愛が底流にあり、自身は町方の大年寄役として、民政に直接関与してきただけに、領主の変遷には関心を持ち、後世に事実を伝えようとする責任感のようなのがこの編集を駆り立てたものと思われる。

同書は、流布本が少なく一般的には長らく知られていなかった。それを昭和十九年、戦時下でこの貴重な文献の消滅を防ぐため、更には、郷土の先覚者に対する感謝と顕彰のため『宍粟郡守令交代記』の校訂翻刻を公刊すべく島田清氏に委嘱された。戦時下の物資不足の時であり、謄写版刷りのいわゆるわら半紙本として作成された。それも時を



『校訂播州宍粟郡守令交代記』山崎郷土研究会 平成6年

経て散逸してきたので、当郷土研究会が平成三年から前述の校訂本を復刊すべく準備を進め、平成六年に復刻版を出版することができた。郷土史研究の先駆者である片岡醇徳に思いを馳せていただきたく、当時の会員に配付した。残部少々あり、希望者には一冊七百円で頒布しているので、大谷までご一報願います。

### 宍粟郡誌を著す

醇徳は宍粟郡守令交代記を著してから十年後の宝永五年（一七〇八）八十一歳になって『宍粟郡誌』を著した。その序文に

予、此所の産なり。既に老いて、知己喪ふ歳まで住慣れぬ。当郡は、山高くそびへ、川深くさかまく流れ、深山幽谷の僻地なり。遊人騷人の往来も稀なれば、歌枕にのりたる名蹟もなし。しかれども、勝地・景象のなきにしもあらず。世の人知らざるもいたまし。つらつら郡中の地形をおもふに、北山幽陰の地といへども、谷々皆東南に流れ向ひ、日月の光偏ならず。土肥へ、水清く、五穀雜穀草木諸品生々の地、徳厚く成長盛なり。人を養ふ事すくなくならずして大なり。國中他郡に勝れて宜（よき）地なることを空しく打捨、記さざるもいとほいなし。故に郡内の事実をば、耳目に触るるに従ひ、遺忘に備へんと前後序ですれども、ひそかに筆記し置ぬ。既に箇候も重なりしかば、首尾参考し、改め綴らんとおもひしかども、春來衰病の難にかかり、甚老憊に及び思漸く邇日病間あり、しかとも叔麦を不弁程の棄



才なれば思ふて益なく止みてなんとす。されども、やめがたき志あるにて、他力を仮り全禄と綴り編みて、家族に残さまく欲して筆を染め始む。(下略)

と記し、宍粟郡は土肥え、水清く五穀豊穡の地で、徳に篤く、成長盛んなところである。他郡に勝って良き地であることを分かつとせず、記録にも残さないことは残念なことである。とかねてから記録しておいた事柄をまとめて一卷の郡記とした。名付けて『宍粟郡誌』というと、序文に書いている。

この書には、郡境、郷里、城跡、市、山河、神社、寺院、土産、地勝、風俗、人物の項が挙げられ、各項で当時の様子が詳らかに記載されている。

醇徳の郷土への誇りと愛着が序文の中からも、十分に読み取れるし、後世に記録を残そうとする思いの深さも切ないほどに感じ取れる。

醇徳は、『宍粟郡誌』を著した後、余命の少ないことを悟ったものか、我が子たちに「家訓」をしたためている。その最後に、我が子孫たる者、及び後来の者、私を知ろうとする者は、この家訓を以って識るべし。と結んでいる。翌年、八二年の生涯を終えている。『宍粟郡誌』は近年まで未刊のまま放置されてきたが、昭和三十三年(一九五八)になって、西播史談会の小林楓村氏が中心となり、宍粟郷土研究会の安井俊二氏等が編集に加わり、西播史談会発行の『播磨』第三十九号で特集として宍粟郡誌が掲載

された。

この復刻は宝永五年(一七〇八)からちようど二五〇年後のこととなり、片岡醇徳の偉業が改めて愛読者たちに知らされた。江戸時代中期に郷土研究に没頭した人物が居たという事実に感銘を受け、ここに拙文を書かせてもらった。

## 「敬」についで

「敬齋箴」と「閻齋さんの「序」・「付録」

—「学に志す」の人への書—を中心にして

鎌田裕明

はじめに

太平洋戦争の後、世界の石油業界に君臨していたメジャーに対し、日本経済の自立と産業の発展のため想像を絶する危険と闘つてエスタブリッシュメントの寡占体制に風穴を開けた男、出光佐三。彼は既成の価値観と慣例を越えたシステムと方法を以て外務省や通産省を動かしイランからの原油輸入に成功しました。出光佐三の志と、理想を実現するための強い意志と行動力。私は彼の発想と生き方に幕末以後の日本を引っ張ってきた志士や、太平洋戦争後の日本の驚異的な復興を担った人たちに共通した精神を感じます。註1

本稿では、理想の国家や豊かな社会創出への情熱や行動力の形成や、現状の困難を打破する志や精神の育成に深い関わりのある



闇齋さんの「敬」について考えてみたい。それは、日本民族が歴史の展開の中で発揮した技術や文明、哲学や思想、文学や芸術の数々の領域での偉業を達成した原動力であるように思えるのです。

闇齋の思索は存在論から人倫の学、政治論から神道論など多岐にわたり、私はとうてい全容を記すような位置にいるわけではありません。ここでは「敬齋箴」とこれに係る闇齋の著述に依りながらその考えに迫ってみたい。註2

『敬齋箴』は朱子が張南軒の「主一箴」に啓発されて、書齋の壁に十項を書いて自警とした箴言（しんげん：戒めの言葉）です。闇齋は三十四歳の慶安四（一六五二）年、所説や註を付けた付録を作り、四年後にこれに序を付けました。出版は寛文十（一六七〇）年。以下「敬齋箴序」・「敬齋箴付録」と記します。註3

一 人間の性は善、人はつながりの中で生きている。

「敬齋箴序」は次の言葉で始まります。「人の一身五倫備はりて、身に主たるは心なり。この故に心敬すれば一身修まりて五倫明らかなり。」註4闇齋の深い思索の結晶が端的に述べられています。

闇齋は特にここに補註を付けて註5「このところが「敬齋箴」のキーワードだ、一身五倫の説はちゃんとした理があるのだ、余人はこうは言い得ないところだ。敬一つでグット済むのだ。今、吾も人も敬みさえすれば、家老になっても奉行になってもよいの

だ」と述べています。

また闇齋は「敬齋箴付録」の冒頭に註6、朱子が「敬齋箴」の後書きに、敬の一字、学者がもし能く実はその力（敬の一字の）を用いれば、程子両言の訓と雖もなお剩語となる、と書いているのを引用しています。このように「一身五倫」と「敬」は闇齋学の基本なのです。

さて、人が生まれつき五倫を備えているというのは、人は本来よく生きる可能的存在であり、善なる資質を持つという人間観を示すものであり、人への信頼と未来への明るい展望に繋がっています。また闇齋が「心が身の主人」というのは、人の自律への賛歌であり精神や意志に限りない期待を寄せているということでもあります。更に「心敬すれば身修まり・・」は心が張り詰め引き締まったものであって、「身」があるべき柔軟性と能動性を持つことになり、主宰的である心と「敬」の内面化への道を打ち立てています。

なお、五倫とは、人は生まれてから親子、君臣、夫婦、長幼、及び朋友という五つの人間関係（他者と接して交わる）の中で育つが、そのなかで親（親愛）・義（礼儀）・別（男女の区別）・序（兄弟の順序）及び信（朋友の信義）という五つの、本来持っている徳性がそれぞれの人間関係の中で培われる。人はこれを更に豊かにしていかなばならない、というのが闇齋さんの考えです。

二「敬」は儒学の始めをなし終わりをなすの工夫……

『闇齋先生講義』は、次のように始まります。註7「それ敬の一字は儒学の始めをなし、終わりをなすの工夫にして、その来たること久遠なり。天地の開き始まりしより以来、代々の聖人道統の心法を伝へ来たり給うふも、この敬に過ぎざるなり。」

ここで謂ふ「道統の心法」とは儒家の正統性をいう言説で、代々聖人によつて伝えられてきた(道統)、心の教え(心法)の意味です。註8

闇齋にとつて儒学の修養の基本は「敬」である。これは原初以来の真理であり、闇齋が致知、力行の結果得た命題です。儒学の文献を涉獵し到達した闇齋ならではの境位からのみ言い得た命題のように思えます。この「敬」はこれまでの聖人(儒学の正統を継ぐ人たち)の心法(精神修養の法)であると解されています。

では、「敬」の内容ですが、一つの事に心を集中して他へ適かぬ事で「鬱乎々々と放ちやらす、平生きつと照らしつめる」体力をやたらに消耗させず真に大事なことに傾注する生き方を述べています。つまり、至上の価値への精励や、人への礼を持った振る舞いです。ここでは人間存在を他の人との関係で捉え、この中で敬を持った触れあいをすることを強調しています。そして、事に当たってはその事の上に心をしっかり置き、他の事に心を適かさなない・移さないことです。更に、精はくわしと訓じ読み、汚れや不純物を削り落として純粹なものに仕上げる心で、一つの絶対化された理念型を、尊崇の念を持ってつくるといふことです。そしてこのような思考の型は、明治以後、興隆期の日本を担った若者

たちの著述や手記にも数多く見られるところです。

さて、ここで闇齋さんの「敬」に関する迫力ある説明を現代語に直してみましよう。註9

身とは何か、口鼻耳目頭手足である。これらのものは、例えば門、戸、窓などと同じで一日中、心が入りするところである。

心は家の主人のようなものである。だから、心をさして主人公とも云えるのである。此の主人公が、例えば門を出て外の物に出会う時に、大切な宝を見るような心で、屹度(襟を正し巖然と)するときは、やたらと外の物に心を奪われないものだ。もしこの時に、鬱乎々々として心を奪われれば、家を守る主人公がいなくなるとなり、これよりは、足が地に着かず、手は慎みを失い、目は宙に浮いて、口元は弛み放しで、声はうわずり、頭は落ち着かず、氣迫や氣力はなく、顔つきはうつろに、顔色は弱々しく、一身体動きはだらしく、礼にはずれて、常軌を逸した法外の人となる。これは心に敬みをなくして、身が修まらなくなっている心不在の姿である。

身に対して心がどのような位置を占めるか、心不在でどんなに脆弱になるかが、適切な例で示されています。

三 主一無適 惟精惟一(しゅいつむてき ただせいただいつ)

主一無適とは、「謂ふところの敬は一を主とする之を敬と謂ひ、謂ふところの一とは(他へ)適(ゆ)くこと無き、之を一と謂ふ。」であり、この解は朱子学派の敬の字の根本解義です。註10

「主一無適これを敬と謂ひ、無適これを一と謂ふ」、「敬は主一無適のこと、また惟精惟一」とは、一つのこと終始し他を見ない、ただ一つのこと心に心を込める、ということ。そして、まさにこれが学ぶものの基本ということ。『敬齋箴序』は「治を願う君、学に志す士」は敬齋箴の訓戒を拳拳服膺して失はざるべきなり、と結んでいます。註11

また、敬には二種類あり註12、一つは主事の敬、一つは主一の敬。主事の敬は悪しくして、主一の敬はよし。例えば書を見るに、向こうの書へ心を、移し奪われて、手前荒くなるは主事なり。自分の心を乞と正しくして書物に係り応ずるのは主一の敬です。事に動かされるのはだめで、心を一つに正しく定めているのがいいのだと記しています。

#### 四「三綱淪み 九法敦る」

敬齋箴の實踐が少しでもおろそかになると、朱子は「三綱淪み九法敦る」世となると戒めています。註13

闇齋の講義によると「三綱とは、君は臣の綱、父は子の綱、夫は妻の綱にして、臣子妻の三つは、常に君父夫の三つに繋がれ掛かりて養われるものである。……五倫の中でもこの三つは特別重い。つながりが少しでも緩んだり切れれば、臣として君に弓を引き、子として親を殺し、妻として夫をないがしろにするような世になる。これを指して三綱淪み退転するといふのである。」ここでは、治安のよさとか社会の安定は三つの綱がしっかりと張られ

ていることが前提だ、これが沈むと国が荒廢、頽落すると述べています。

また九法とは、『尚書』の「洪範」の九疇です。天下の政を五行、五事、五紀などの九原則の上に立て、少しでも不敬であれば天下の政も破れ廢れ、法が立っていかないと述べています。

ここでも「治（治政）を願う」君子への訓戒の書としての「敬齋箴」の意図がはつきり見てとれます。

前述の「主一無適」は時代を超えて今日に至り、程子、朱子を經て闇齋により深い意味と普遍性を与えられ、その真価を發揮したように思われます。阿部次郎は次のように大正四年の日記註14に書いています。「下らないことから力を抜く……一大事にウンと力を入れるために。上滑りして通る……中心の問題に注意の焦点を集中するために。……外来の刺激はあまりに猥雑である。全ての遭逢 (Erfahrung) は内から抑揚 (Betoenung) をつけなければならぬ。」と

#### おわりに

「敬齋箴」は、治を願い、学を志す人への書といわれています。『大学』は同じスタンスで文字数も十倍を超え、記述も体系的で緻密です。心の主宰する「敬」の道を説く「敬齋箴」と、高い完成度を誇る『大学』は、ともに読者を啓発・鼓舞し、日本の近世から近代にかけて有為の若者を育んできました。

この機会に「敬齋箴」を少し丁寧に読みました。十余年前、闇齋



研究会の時の会長本條衛先生はじめ七名の会員とともに読んだ時に比べ新しい発見の喜びもありました。

これも郷土研究会の大谷司郎会長や片山昭悟会報部長の強い御のおかげです。最近とみに持続力や集中力が減退した中で、何とか自らの鞭打ち仕上げることが出来ました。

「敬」については、他の人のおつきあいの中で、つつしみ、敬い、誠意、そして自己抑制を以て自らの至らなさを矯め、人とのつながりを深める中で光風霽月でいきたいと願っています。

また、表現の練り込みの不十分さや、論理の飛躍など推敲の不十分さは今後の機会に正していきたいと思っています。

註

1 このへんのところは、百田尚樹『海賊と呼ばれた男』（下）

講談社 二〇一二年版 70〜249頁でドラマテックにまとめられています。

2 闇齋研究の書には、目を通しただけでも、例えば、高島元洋

『山崎闇齋』 岡田武彦『山崎闇齋』 田尻祐一郎『山崎闇

齋の世界』 丸山真男『闇齋学と崎門学派』 植村秀和『丸

山真男と平泉澄』 小室直樹『論理の方法』 朴鴻圭『山崎

闇齋の政治理念』 澤井啓一『山崎闇齋』 子安宣邦『江戸

思想史講義』などがあり、それぞれの著作の鋭い問題意識と

課題への迫真性、膨大な資料への切り込み、精密な論理の展開などには大きな感銘を受けたことでした。

3 『山崎闇齋と崎門学派』日本思想体系31 岩波書店一九八〇

年版所収の

① 「敬齋箴」山崎闇齋編（闇齋の序と付録が併載されている）

② 「敬齋箴講義」山崎闇齋 植崎正員が講説の要旨を欄外

に書き留め、それを摘録編輯したもの。註8の子安宣邦氏は、擬態語的表現と近世口語的話し法の記録に格別のリアリティがある」と評価している。

③ 「敬齋箴序」・「敬齋箴付録」私の原稿は引用にあたって、適宜 書き下しと現代語訳 とを使い分けました。

4 山崎闇齋「敬齋箴序」前掲74頁

5 山崎闇齋「敬齋箴講義」前掲97頁

6 山崎闇齋「敬齋箴付録」前掲76頁

7 山崎闇齋「敬齋箴講義」前掲80頁

8 子安宣邦『江戸思想史講義』岩波現代文庫二〇一〇年版52

9 七行後の「鬱乎々と放ちやらず……」は『敬齋箴講義』81頁

10 山崎闇齋「敬齋箴序」前掲74頁

11 この続きの「主一これを敬と謂ひ……」は81頁

12 山崎闇齋「敬齋箴講義」前掲97頁

13 山崎闇齋「敬齋箴講義」前掲90頁

14 佐藤直方『敬説筆記』前掲書102頁

15 山崎闇齋「敬齋箴講義」前掲93〜94頁

16 阿部次郎『合本三太郎の日記』角川選書平成二十年版317

17 頁

18 頁

19 頁

## 戦国武士から高瀬舟回漕業へ

―出石下村家の由来―

浅田耕三

戦国時代の明応二年（一四九三）、石作里の揖保川東岸（現山崎町須賀沢）の小高い山の頂上に攝津国有馬郡下村庄（現神戸市北区山田町）から移住してきた下村貞貞という人物が城を建て、<sup>ひしやま</sup>聖山城と名付けて城主となった。

奉公人や村人たちを勧誘して家臣にくみ入れ、自らは長水城主広瀬氏に仕えたと伝えられる。二代目、下村貞康と三代目、下村貞長、その弟祐長、四代目、則久、則俱も共に長水新城主宇野氏に仕えた。

しかし、その四人のうち三人は天正八年（一五八〇）五月、長水城の落城の際、自害あるいは討死して主家に殉じた。伝承によればこの三人のうち則長は長水城の軍師（軍師という呼称や明確な概念は当時なかったようだが）格の処遇を受けていたらしい。おそらく作戦や外交などについて主君の相談相手となり、意見具申などとしていたのであろう。

四人の親子兄弟のうち則久だけが平瀬源右衛門清正という政商の手引きによって長水城を脱出、源右衛門の本拠地千種に一時身を隠し、しばらくして千種の西蓮寺の縁によって因幡街道の宿場町平福の正覚寺にかくれ住み、ここで妻帯し、子を生し元和三年

（一六一七）五九年の生涯を閉じたと伝えられる。

則久の子は在地の名をとって平福屋又兵衛と称し、千種屋平瀬清正の子清信の保護のもと播州山崎に移って商人となった。

近世の商家下村家はこれを初代とする。二代目甚右衛門は山崎本町に店を開き、山崎千種屋の鉄山経営の一翼を担って稼業を隆盛した。山崎町東出石に移って高瀬舟による貨物輸送に乗り出すのは、天明二年（一七八二）のことである。

詳細な記録がないので個々の具体的な事情をのべることができないが、以上大まかな下村家の由来である。

なお、商人下村家の元を開いた則久が、どの時点で長水城に見切りをつけたかは明らかでないが滅亡の見た主君宇野氏を見限るとは近世武士の倫理観で計れば不忠不義の輩のように見えるが、中世武士気質ではあながち道に外れた行為ともいえなかったようだ。

中世には「侍は渡り者に候」という言葉があったという。

侍というものは仕える主人を選びよりすぐれた主人とみれば、さつさと奉公替えをする生き方をしていた。儒教（朱子学）の影響を色濃くうけた「君、君足らずとも臣は臣」とか「武士道とは死ぬこととみつけたり」といった観念論に縛られた江戸期の武士の価値観とはことなり、戦国の武士は現実主義者で、したたかに生きぬく力をそなえていた。

それがごく自然な人間像であり、むしろ赤穂義士や葉隠れの方が人間として不自然な映像というべきであろう。（ただしその忠

義に人の心をうつ美しきやかなしみがあって芝居や小説の素材になるのだが―)

天正八年一月、三木城が秀吉の凄惨きわまる「干殺し」に遭って落城し、つづいて三月に英賀城が落城寸前となり、秀吉はその攻撃軍の一部二千程の兵を割いて長水に押し寄せた。

邀撃する長水勢はせいぜい五百、誰の目にも勝敗は明らかで、長水軍は絶望的なたたかいを強いられたのである。

下村則久と平瀬源右衛門の間にどんな交流があったか、単に、俗にいう馬があつたか、それとも則久のすぐれた人物や才覚を源右衛門が見込んだのか、あるいは軍師則長と源右衛門は以前からの旧友であつて、長水城の組織の上で、重役同士のよしみがあつたため脱出の手助けをしたか、記録が少なく知ることとは困難だが、殺気だった騒乱殺戮の場から助けるのは相当の危険が伴つたと想像すれば、これは後者と推察されるのである。

付記

この拙稿は山崎町出石下村哲三氏より資料の提供をうけ記したものです。(筆者)

大雲寺過去帳・池田文庫・萬学覚帳からの実在記録

天正八	一五八〇	下村則久長水城落城と共に平瀬源右衛門清正の手引きにて平福に走る
〃	〃	〃
〃	〃	下村三郎則俱・狭戸村で戦死・下村四郎祐長長水城で戦死
〃	〃	下村則長(長水城軍師)大森で自害
慶長五	一六〇〇	平瀬清正没す(七四才)
元和三	一六一七	下村弥一郎則久没す
寛永十	一六三三	千種屋清信・保吉・鉄山経営始む
慶安三	一六五〇	大雲寺地誌帳に記載さる
〃	一六五一	平瀬清信山崎に鉄出店
慶応元	一六五二	下村一族平福から山崎へ平瀬清信の保護を受ける
〃	一六五二	平福屋甚右衛門・山崎本町(平瀬家の前通りに平福屋号で出店)
万治二	一六五九	千種屋清信没す
天和元	一六八一	平福屋藤兵衛・千種屋の援助で姫路に出店
貞享四	一六八七	平福屋甚右衛門没す
元禄元	一六八八	平福屋藤兵衛大雲寺に石塔建立
〃	一六九九	平福屋又兵衛地誌帳に記載さる(第一次又兵衛)
享保六	一七二二	平福屋藤兵衛没(六二才)
宝暦六	一七五六	千種屋鉄山倒産

※長水城落城後は平瀬家は千種屋・下村家は平福屋と改名



# ひじりやま 聖山城址と秀吉軍の行軍ルート

竹内 克司

## 聖山の由来

聖山城跡は宍粟市山崎町須賀沢（出石）にあり。しろう五〇名山の一つ高取山の登山路に位置し、揖保川に向かって突き出た聖山（別名堅木山）の山頂に築かれた山城である。聖山城というのは「堅木山」の別名が「ひちりき山」と呼ばれひちりきの「き」が省かれて聖山城と呼ばれるようになったという。聖山城の曲輪跡に愛宕神社が建てられ、麓に磐築神社が祀られている。

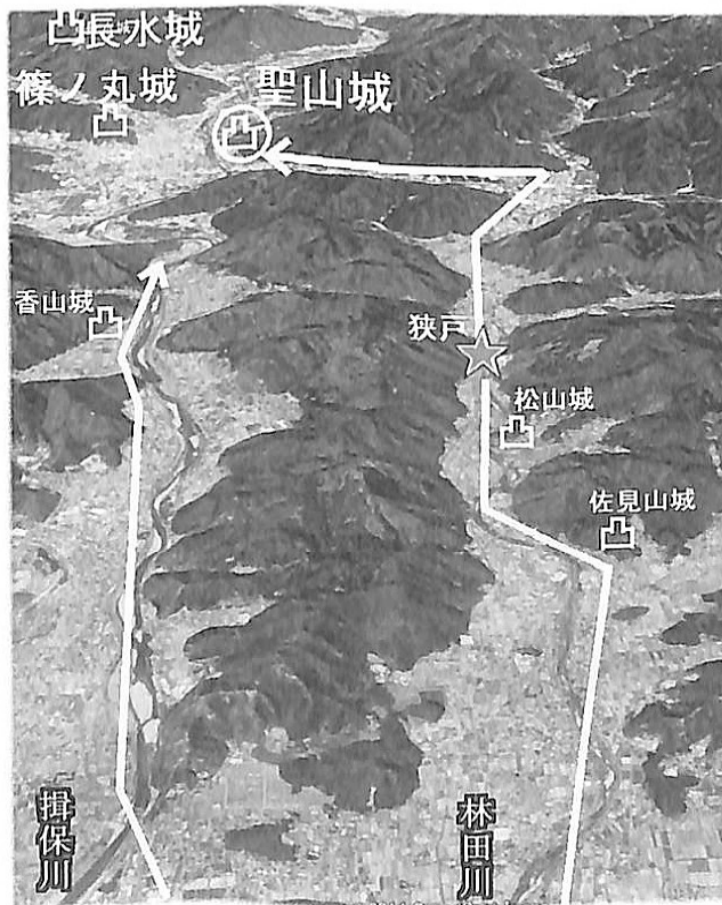
## 交通・軍事上の要衝の地

主郭は東西五〇m、南北一八mで、西先端部は数段高くなっている。東端には土塁の一部が残り、主郭を取り巻く帯曲輪がはっきり残っている。背後の尾根筋には堀切等は見られない。

聖山城は中世室町期、播磨守護職赤松円心の支配のころ、北方の守りのために築かれた篠ノ丸城・長水城を支える出城の一つであったといわれている。揖保川東岸の河東を往来するには、この山麓を通らざるをえず、交通・軍事上の要衝に位置していた。山麓には古町という地名（小字）が今に残る。

## 秀吉軍の行軍ルート

秀吉軍は英賀城を落城二日前に、軍を分けて宇野氏居城長水城



に指し向けた。『長水軍記』に「先勢一千騎荒木平太夫大将ニテ林田通ヨリ向フ、次ノ一軍三千騎小寺官兵衛孝高大将ニテ皆崎ヨリ向フ、次ノ一千騎神子田半左衛門大将ニテ同林田通りヨリ向フ、後陣ニハ秀吉自ラ木村、竹中、石見、樋口其他大勢ニテ林田通ヨリ向ヒ給フ」とある。

秀吉軍の宍粟宇野氏の城攻めは、林田川の林田からと揖保川の新宮方からの二方面の侵入路があった。

林田方面では、林田町八幡の佐見山城、林田松山城を足がかりに北上していった。『福岡文書』によれば、林田松山城には本郷宗祐（宇野政頼四男・祐清の弟）がいたが、戦わずして降伏したことを伺わせる。

新宮方面は、嘴崎から川を渡り、新宮の香山城を落とす、山崎町城下に向かったようであるが、渡河といくつかの難所のため、大軍には不向きであったと思われる。

同軍記に、長水城主の宇野祐清が「狭戸ノ山蔭ヨリ左三巴ノ旗三流真先ニ押立テテ時ヲ作ツテカケ入ル」「秀吉ノ勢周章騒ギテ揉ミ合ケル間祐清ノ兵悉ク乱レ入ッテ未ダ目覚メズシテ起キアガルヲ起シモ立ズ切殺シケレバ秀吉ノ兵夥シク討ルル」とあり、宇野氏の緒戦の活躍ぶりが描かれている。軍記は読み物ではあるが、安富町狭戸の山蔭より待ち受けていた宇野祐清軍は林田から行軍する秀吉軍と激戦が繰り広げられたことは、狭戸集落に残された数多くの五輪塔が物語っている。

### 秀吉軍聖山に本陣を置く

播磨の中世の多くの城は、天正五年（一五七七）以後の羽柴秀吉の中国攻めで落城した。秀吉は、三木城（三木市）を兵糧攻めで落城させ、英賀城（姫路市飾磨区）を完全包囲したあと、最後まで抵抗する西播磨の奥地宍粟郡を目指した。天正八年（一五八〇）四月、その最初の攻撃目標となったのがこの聖山城で、秀吉はこの城を落とし本陣を張り、篠ノ丸城と長水城に対峙したのである。戦いは、圧倒的な軍勢と秀吉の事前工作によって勝負は時

間の問題であった。

かゝり火に うの首見える 広瀬かな 『豊鑑』

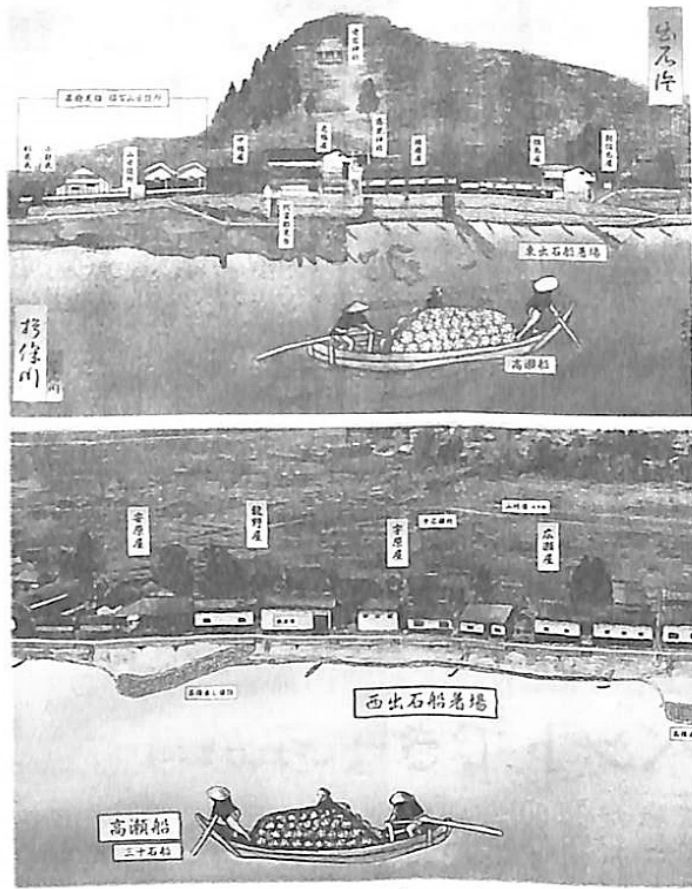
これは連歌師里村紹巴が詠んだ句で、そのときの長水城主の宇野氏を鶴の首と表現し、長水落城寸前を詠んでいる。広瀬は、眼下に広がる広瀬郷で今も地名が残る。

秀吉が四国の長宗我部元親に書いた手紙に、篠ノ丸・長水城攻めで「山峰けわしくして大河城のふもとを巻き候」「平城二ヶ所へたてこもり候……、親子のもの後の山へ逃げ入後、民部大輔山城へ逃げ登る候」とあり、さらに田路・安積氏に長水城内の様子を内報させる文書が残っている。秀吉や官兵衛がこの場所にきたという確かな記録はない、しかし秀吉は一度はこの地にやってきたからこそ、このような情景描写や指示ができたのではないかと思っている。

### 歴史を感じる格別の場所

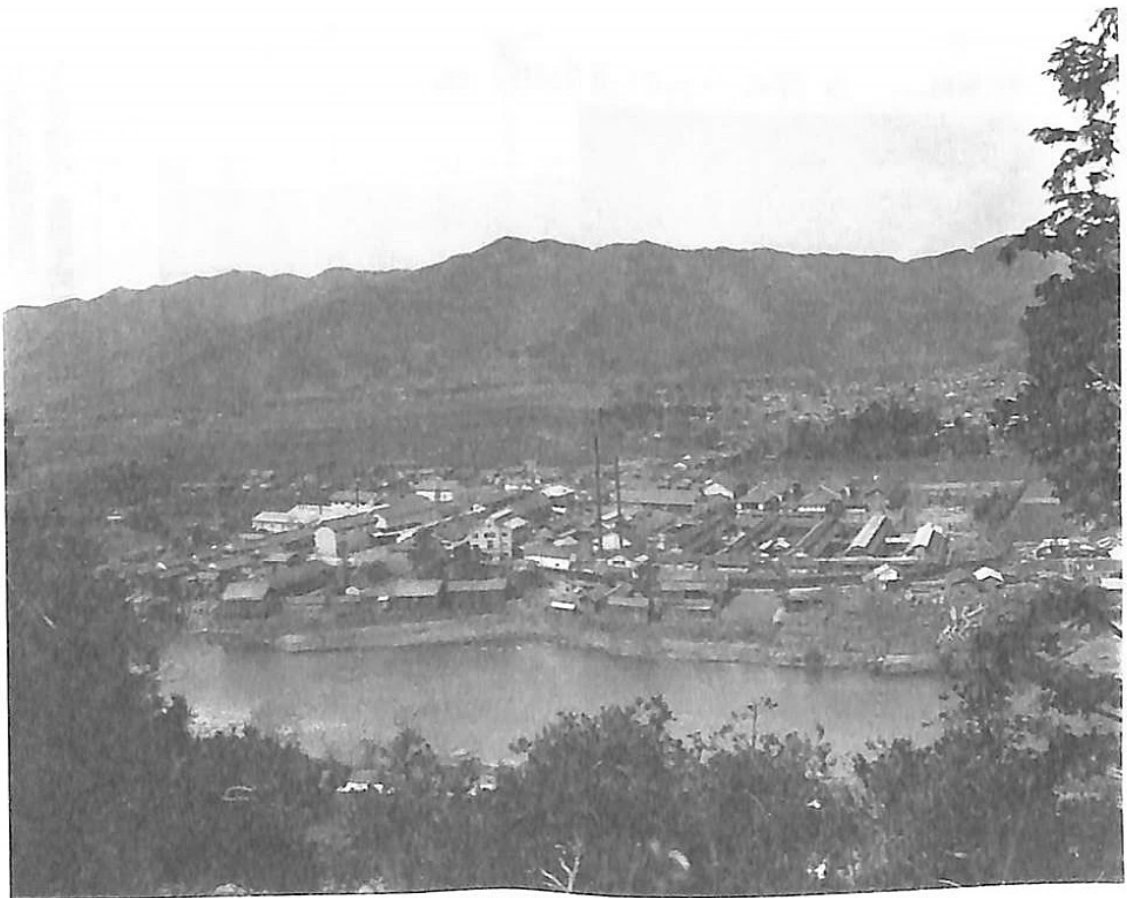
聖山城址からの景色は格別である。それは、篠ノ丸、長水の二城が望めることのほかに、合戦後の江戸初期池田輝澄が入封し、元和年間（一六一五～二二）山麓の揖保川に高瀬舟の発着場ができ、網干までの水運が物流の大動脈となり浜は大いに賑わった。

明治中期から昭和中期にかけて宍粟市役所周辺一帯は郡是製糸山崎工場が宍粟郡の産業の中心となった。昭和初期には農家の半数が養蚕業を営み、集荷された繭が年間四万五千貫（一六五トン）あり、郡内の多くの女工がこの工場で繭を紡いだのである。『宍



※出石浜の高瀬舟 絵：下村哲三氏

粟一九五二 宍粟地方事務所編  
 川下には幾たびかの大洪水に耐えてきた宍粟橋が傘寿を迎えなお健在である。  
 山頂からは、宍粟市山崎町の山河に生きた人々の残像がここかしこに残されているのが見えてくる。



※聖山城址からの西方展望 大正一三年の郡是製糸工場



# 城下町山崎 見に来て

「まち歩きガイドの会」が発足

宍粟市山崎町の中心部に残る史跡や文化施設を案内する「やまさきまち歩きガイドの会」が1日、発足した。年間を通じて活動し、同町内で開催中の散策イベント「山崎ウォーキング&ウォッチング」で3日から、篠ノ丸城・山崎城の城下町の風情が残る町並みを紹介する。

同町中心部は、南北「山城・篠ノ丸城や、江朝時代の築城とされる」戸初期に山崎藩主・池



「やまさきまち歩きガイドの会」のメンバーたち＝宍粟市山崎町中広瀬

## 散策イベントできょうから

田輝澄が築いた平城・山崎城の城下町で、商店街の路地などにその面影が残る。この町並みを歩いてもらうと、商店街などでは毎年、5月の連休に散策イベントを開催。イベント限定で有志がガイドを務めたこともあったが、時期を問わず訪問客を案内できるようにするため、同会を発足させた。メンバーは6代から80代までの男女17人。因幡街道の往来が盛んだった昭和初期に「地獄谷」と呼ばれた歓楽街があったことを知る人もいる。坂本忠彦会長(68)は「そこに史跡が残る由緒ある町を紹介していきたい」と意気込む。ガイドは2週間前までに電話で申し込む。

「神戸新聞二〇一四(平成二十六年)五月三日 西播版」掲載記事より

無料。3～5日の散策 10時と午後1時から約  
イベントは申し込み不 2時間、町を案内する。  
要で、宍粟防災センタ しよう観光協会 ☎0  
1(同市山崎町鹿沢) 790・64・007  
を出発点に、各日午前 7

『やまさきまち歩きガイドの会』が五月一日に発足しました。

山崎の史跡や文化施設を紹介する会で、会長は、研修部長でもある坂本忠彦さんです。「そこここに史跡が残る由緒ある町を紹介していきたい」とコメントを紹介されています。

山崎は歴史と文化があり、今も城下町の風情が残り、酒蔵や寺院や神社があります。

宍粟防災センターを起終点に約2時間のコースを、ボランティアガイドのみなさんが案内されます。

申し込みは2週間前に電話でしろう観光協会に申し込みをお願いします。山崎郷土会員の方々も多く参加されています。

# 興国寺の山門と梵鐘

会報部

## 山門に梵鐘の音が響く

山崎町寺町の興国寺には、江戸時代の正徳二年（一七二二）の洛陽三条釜座和田信濃の梵鐘がありました。太平洋戦争で、昭和十七年（一九四二）に供出され、その後、七十二年の間梵鐘はありませんでした。

この度、山門の修復工事がされ、もとあったところに新しい梵鐘が釣り下がりました。

新しい梵鐘は、京都太秦の岩澤の梵鐘です。

小野瑞巖住職によると、八月から初撞きをされるそうです。

なお、山門は、平成二十五年六月に宍粟市指定文化財（建造物）に指定されています。江戸時代の最古級の山門で、木庵禪師の書とされる「泰安山」の額が掛けられています。



修復された興国寺山門と木庵禪師の額

興国寺は、臨済宗の妙心寺派の禅宗のお寺です。

『山崎町史』によると、もと長安院という浄土宗のお寺で、慶安二年（一六四九）に松平（松井）康映の菩提寺として創建されました。その後、池田恒元の父の院号の興国院殿から興国寺と付けられました。

なお、寺町には、興国寺のほか浄土宗の大雲寺、日蓮宗の妙勝寺、臨済宗の恩沢寺、法相宗の薬泉寺と由緒あるお寺が多くあります。

いずれのお寺も江戸時代の歴史を今に伝える郷土の貴重な寺院です。

一度ゆっくりと寺町周辺の歴史探訪をかねて訪ねられたらと思います。今回紹介しました。



新しい梵鐘を撞かれる小野住職

# 江戸時代の宍粟郡金屋村鋳物師

## 長谷川氏の梵鐘について

片山昭悟

### 一、はじめに

江戸時代の宍粟郡金屋村鋳物師長谷川氏については、これまで『山崎郷土会報』九〇号にも紹介している。

長谷川氏の姓名については、長谷川孫兵衛と長谷川五郎兵衛が知られる。

長谷川孫兵衛は、藤原吉正、藤原吉継、藤原吉次、藤原吉房、藤原吉久、藤原吉信、藤原吉則、藤原恒光の梵鐘や喚鐘が知られる。

長谷川五郎兵衛は、藤原家継、家次が知られる。いずれも藤原氏を名乗っている。

このほかに長谷川孫兵衛の代理で鋳造した伊三郎、福岡休作が知られる。

宍粟郡金屋村鋳物師の長谷川孫兵衛と長谷川五郎兵衛には、当時鋳物師を支配していた公家の真継家から鋳物師の許状が発給されている。

今回、長谷川氏の長谷川孫兵衛と長谷川五郎兵衛について名前ごとに年代順に紹介させていただく。

### 二、長谷川孫兵衛と長谷川五郎兵衛集成

①長谷川孫兵衛藤原吉正は、長谷川孫兵衛の中でも早い時期のもので、『兵庫県神社誌』によると、山崎八幡神社鐘は、寛永十二年（一六三五）の初鋳を、延宝四年（一六七六）に改鋳している。貞享四年（一六八七）の改鋳は、長谷川五郎兵衛藤原家継と長谷川孫兵衛藤原吉継と藤原吉次と共同で鋳造している。

②長谷川孫兵衛藤原吉房は、たつの市新宮町時重の西勝寺喚鐘を宝永五年（一七〇八）に鋳造しているが、吉房の名のものとしては、初出である。

③長谷川孫兵衛藤原吉正は、宝暦四年（一七五四）と宝暦十年（一七六〇）・明和七年（一七七〇）と明和八年（一七七一）と安永三年（一七七四）の頃で、

一宮町河原田の河原田八幡宮梵鐘は、宝暦四年（一七五四）に長谷川五郎兵衛藤原家次と共同で鋳造している。

山崎町中野の桓武伊和神社梵鐘は、宝暦十年（一七六〇）に長谷川五郎兵衛藤原家次と共同で鋳造している。現存する。

山崎町上ノの観音寺の喚鐘は、明和七年（一七七〇）で現存する。

山崎町上ノの岩上神社梵鐘は、明和八年（一七七二）に長谷川五郎兵衛藤原家次と共同で鋳造している。

山崎町大沢の円通庵喚鐘は、安永三年（一七七四）で現存する。



吉正の鑄造した梵鐘は、長谷川五郎兵衛藤原家次と連名であることから見て、長谷川五郎兵衛の名義がないと鑄造できなかったもの考えられる。または何等かの名目で冥加金みょうかぎんを五郎兵衛に払うことで鑄造が許されたのではないかとも思われる。

明和八年（一七七二）には真継家から長谷川孫兵衛と長谷川五郎兵衛に鑄物師の許状が発給されている。

④長谷川孫兵衛藤原吉久は、宝永元年（一七〇四）と文化十四年（一八一七）の頃で、

一宮町森添の御形神社の梵鐘は、宝永元年（一七〇四）に鑄造している。鐘楼は現手水所であつては梵鐘が釣り下げられていた。

山崎町中野の徳王寺喚鐘は、文化十四年（一八一七）で、吉久は、御形神社鐘を造つて百二十八年後に徳王寺鐘を鑄造している。

徳王寺鐘は雨乞いの鐘として知られる。現存する。

⑤長谷川孫兵衛藤原吉信は、享保九年（一七二四）から享保十七年（一七三二）の頃で、

山崎町中野の徳王寺梵鐘は、享保九年（一七二四）長谷川五郎兵衛藤原家次と共同で鑄造している。

波賀町安賀の波賀八幡神社喚鐘は、享保十一年（一七二六）で、山崎町高下の法伝寺喚鐘の初鑄鐘は、享保十七年（一七三二）で、年代からみてこれも長谷川氏の作かと考えられる。

享保十二年（一七三二）には真継家から長谷川孫兵衛と長谷川五郎兵衛に享保二十年（一七三五）長谷川五郎兵衛に鑄物師の許状が発給されている。

⑥長谷川孫兵衛藤原吉則は、天明二年（一七八二）から天明六年（一七八六）・寛政元年（一七八九）から寛政九年（一七九七）・享和二年（一八〇二）・文化五年（一八〇六）の頃で、多くの梵鐘・喚鐘を鑄造している。

佐用町茶屋の慶運寺梵鐘は、天明二年（一七八二）藤原吉則の最初の作である。

山崎町下牧谷の大倭物代主神社梵鐘は、天明三年（一七八三）、波賀町安賀の満願寺喚鐘は、天明六年（一七八六）で現存する。

山崎町船元の一雲寺喚鐘は、寛政元年（一七八九）で現存する。

一宮町伊和の神福寺梵鐘は、寛政四年（一七九二）、千種町千草の長永寺梵鐘は、寛政六年（一七九四）で長谷川五郎兵衛と共同で鑄造している。

山崎町小茅野の位尾神社梵鐘は、寛政九年（一七九七）再鑄で現存する。これには長谷川五郎兵衛の名は見られない。姫路市安富町塩野の了円寺喚鐘は、寛政九年（一七九七）で現存する。

山崎町川戸の元道場の喚鐘は、享和二年（一八〇二）で現存する。

一宮町百千家満の萬福寺喚鐘は、文化五年（一八〇八）で現存する。

天明三年（一七八三）に真継家から長谷川孫兵衛と長谷川五郎兵衛に鋳物師の許状と大工職が発給されている。

十年を経て真継家から寛政五年（一七九三）五月に長谷川五郎兵衛に、天福元年（一二三三）牒が発給されている。真継家から仁安二年牒本紙を所持している。

長谷川孫兵衛は、天福元年（一二三三）牒写を所持している。

寛政五年（一七九三）三月に播磨国宍粟郡岸田村（一宮町上岸田）佛心寺の釣鐘で、宍粟郡金屋村鋳物師長谷川孫兵衛と京三条釜座和田吉兵衛との争論が起こった年である。

長永寺鐘や位尾神社の梵鐘や川戸元道場の喚鐘には、「勅許」がみえることから窺える。

文政十二年（一八二九）三月には真継家から長谷川孫兵衛と長谷川五郎兵衛に鋳物師の許状が発給されている。

⑦長谷川孫兵衛藤原恒光は、天保二年（一八三一）と天保四年（一八三三）頃で、長谷川氏として最後の鐘である。

佐用町上三河の光福寺喚鐘は、天保二年（一八三一）長谷川孫兵衛藤原恒光。

山崎町岸田の明宝寺喚鐘は、宇野正磯先生のご教示によると、天保四年（一八三三）長谷川孫兵衛藤原恒光とされる。

安政元年（一八五四）に大砲鋳造のために差し出されている。

る。

⑧長谷川孫兵衛の代理について、

長谷川孫兵衛の代理は、天保十年（一八三九）と天保十三年（一八四二）文久元年（一八六一）である。

姫路市安富町安志の光久寺の喚鐘は、天保十年（一八三九）に福岡が鋳造している。現存する。

一宮町森添の御形神社の喚鐘は、天保十三年（一八四二）に孫兵衛病氣二付伊三郎が鋳造している。

山崎町高下の法伝寺の喚鐘は、享保十七年（一七三二）初鋳、弘化四年（一八四七）二鋳で、文久元年（一八六一）三鋳は、長谷川孫兵衛後見西新町藤原藤蔵 大工 丹州福知山 住人 釜屋源兵衛作之で現存する。

享保十七年（一七三二）の初鋳は、長谷川氏ではないかと考えられる。

天保十一年（一八四〇）十月に長谷川氏から段村松井太郎太夫に鋳物師の権利が移っているので、長谷川氏の代理として鋳造したことがわかる。

### 三、おわりに

江戸時代の宍粟郡の梵鐘について、宍粟の梵鐘を考える上で重要であり、長谷川氏について、姓名ごとに集成を行った。宍粟市には、未調査の梵鐘も多くあり、今回拙稿を紹介することにより、会員の皆様による調査で新資料が増えることを期待します。

参考文献

兵庫県神職会編『兵庫県神社誌』昭和十五年 臨川書店 昭和五十九年  
 山崎町史編集委員会編『山崎町史』山崎町 昭和五十二年  
 宇野正磯『宍粟鉄山並金屋鑄物史料』是川文庫 平成元年  
 『宍粟郡内寺社ノ鐘々銘写シ』下村榮太郎氏蔵  
 笹本正治『真継家と近世の鑄物師』株式会社思文閣出版 平成八年  
 坪井良平『徳川期における播・但両国の鑄物師』『兵庫史学』第三十七号  
 昭和三十三年

安井俊二『金屋鐘銘写』平成十二年  
 片山昭悟『宍粟の梵鐘』平成十二年  
 御形神社鐘と河原田八幡宮鐘  
 については、御形神社宮司進藤千秋氏より御教示いただいた。

なお、西光寺鐘は、「宍粟郡内寺社ノ鐘々銘写シ」によると、明暦四年（一六五八）とされる。



桓武伊和神社の梵鐘  
 「播州完粟郡金屋住  
 長谷川孫兵衛藤原吉正  
 長谷川五郎兵衛藤原家次」



一雲寺の喚鐘  
 「冶工 當郡住 長谷川孫兵衛藤原吉則」



円通庵喚鐘  
 「同國郡金屋住 長谷川孫兵衛藤原吉正」



位尾神社の梵鐘「勅許冶工 長谷川孫兵衛尉藤原吉則」

# 二十六年度の研修旅行のご案内

## 事務局だより

研修部

平成二十六年度の通常総会が下記により開催されました。

日時 十月四日(土) 午前七時三十分集合出発

午後七時頃帰着(予定)

記

集合場所 神姫バス山崎待合所

日時 平成二十六年四月十三日(日) 午後二時より

行先 岐阜県関ヶ原古戦場・同資料館・不破関所跡・同

場所 宍粟防災センター四階研修室

資料館・養老の瀧

議事 一、平成二十五年事業報告について

参加費 一人 金七、五〇〇円(昼食・入場料を含みます)

二、平成二十五年事業報告について

三、平成二十六年事業計画について

四、平成二十六年会計予算について

以上の各議案は承認されました。

申込方法 九月一日より二十六日まで、神姫バス山崎待合所

北の神姫観光山崎案内所へお願いします。

時間は、午前十時から午後三時まで。

土・日曜祝日は休みです。

会員の家族の参加も可能です。

詳細は、八月発行の会報第一二三号に挿入の、パンフレットをご覧ください。

総会終了後、記念講演にかえて、DVD「生野義挙150年 維新の先駆け」を鑑賞しました。



## 編集後記

『山崎郷土会報 第一二三号』をお届けします。

一二三と並びの良い号です。今回もいずれもご労作を紹介させていただくことができました。

これまでには、昭和八年（一九三三）に宍粟郷土研究会、昭和四十四年（一九六九）から山崎郷土研究会として会報一二三号です。

島田清先生、安田清風先生、藤平忠作先生、宇野正磯先生はじめ先輩の方々の長い間の「山崎郷土会報」の伝統を守り続けて来られたからだと編集に携わり実感しました。

山崎の歴史の調査と研究をすることを目指して、これからも会員の皆様にわかりやすいものを心掛けていきます。

年に二回、八月と三月発行していますので、お気軽に投稿をお願いします。

それから会員の皆様もNHKの大河ドラマ『軍師 官兵衛』を見ておられることと思います。

『山崎郷土会報』をお届けするところに、官兵衛ゆかりの地を紹介される「官兵衛紀行」で、山崎が紹介され、会員の皆様も独自の官兵衛論を述べられていることと思います。

司馬遼太郎は、『街道をゆく九』朝日新聞社 一九七七の「播州門徒 播州揖保川・室津みち一」のはじめに「『播磨灘物語』を書いているところ、播州をあちこちあるいた。因

幡とのさかいにつづく宍粟郡の山崎までは行ってない。山崎に行っていないことがたえず気になっていた。」と紹介されています。

黒田官兵衛についても姫路城から山崎に移った経緯などを詳しく紹介されています。

官兵衛は、天正八年（一五八〇）九月に「山崎の城」に居たと伝えられ、同十二年（一五八四）には「宍粟郡一職」を与えられています。その後、豊前十二万石、筑前では五十二万石の大名へと、歴史の舞台に上ります。茶の湯や和歌をたしなむ文化人でもありました。

（片山昭悟）

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします

# 神姫観光

〒671-2576 兵庫県宍粟市山崎町鹿沢68  
(神姫バス山崎待合所内)  
TEL(0790)62-7588  
FAX(0790)62-0770

創業明治28年・さつき本舗

## 四季の菓子

御送物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の  
真心こめた手づくりの御菓子を

御菓子司 **あさき**

本店：播州山崎町山田 (電) 62-0160

外科・内科

# 山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL⑥0036

ほっと、ひといき

# 伊沢の里

- 各種宴会 祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
- 宿泊 観光、ビジネス 帰省
- 日帰り入浴 生薬風呂、露天風呂、サウナ
- レストラン 御膳、定食、麺類、井物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214-1  
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362  
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

PHOTO-STUDIO  
**Ueyama**  
P.C.S

# スタジオウエヤマ

●山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204  
TEL(0790)62-8027  
FAX(0790)62-8827

心のゆとりのおてつだい

# 安井書店

# YASUI BOOKS

本店 TEL(0790)62-0700  
さつき通り FAX(0790)62-2117  
ブックランド店 TEL(0790)64-2051  
山崎町中井 FAX(0790)64-2052



パンフレット・デザイン広告  
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌  
ポスター・案内状・シール等

# (有) 稲田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454  
TEL(0790)62-0254 FAX(0790)62-4764

まごころを伝えます。

一献献上 品質本位 地酒

## 一播 献州

山陽 盃

確かな品質と味わい。

SANYOHAI  
山陽盃酒造株式会社  
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218  
E-mail info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com